伊勢への巡礼

関宿は、その地理的な位置からいつの時代にも重要な土地でした。「関」という地名は、奈良時代（710-794）に天皇が暮らす都とその周辺地域を守るために設けられた 3 つの関所のひとつである「鈴鹿関」に由来します。鈴鹿関は、東海道の、この町の西端に置かれていました。

また、この町は東西を結ぶ東海道と 60km 南にある伊勢神宮へと続く伊勢別街道との分岐点にありました。平安時代（794-1185）以降、天皇から庶民にいたるまで様々な人々が、日本最も古く最も格の高い神社であり、天皇家が所有する三種の神器のひとつである神聖な鏡が納められている伊勢神宮に巡礼しました。

江戸時代（1603-1867）には、幕府が巡礼以外では人々の移動の自由を制限していたこともあり、神社への巡礼は大衆の娯楽になると同時に、社会の安全弁のような役割も果たすようになりました。巡礼者の数は、時に尋常ではないほど夥しいものになりました。たとえば、1830 年の「御蔭年」（lucky year）には、人口 3,200 万人のうち 400~500 万人が伊勢神宮に参詣したと推定されています。伊勢参りは御蔭年に行うと特に御利益があるとされており、無断で旅に出て、道中で物乞いをしながら費用を賄う奉公人や労働者たちもいました。庶民の夢は「一生に一度はお伊勢参り」だったそうです。

江戸時代、関宿は、江戸と京都を結ぶ東海道（幕府の置かれた江戸と地方をつなぐ五街道のひとつ）に設けられた 53 の公設宿場町の 47 番目となりました。歌川広重（1797-1858)の有名な浮世絵連作『東海道五十三次』（Fifty-Three Stations of the Tokaido Road）には、この町の本陣のひとつを舞台とする一枚が含まれています。関宿旅籠玉屋歴史資料館では、歌川芳虎（1836-1880）の 12 作品からなる『東海道名所圖会』（Famous Places on Tokaido）をはじめ、代表的な宿場町の風景を描いた浮世絵の小規模な展示を行なっています。